

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530795

研究課題名（和文） 北東北における生活綴方教育実践に関する調査・研究—戦後社会科実践との関連から—

研究課題名（英文） Research of Educational practice for “Children’s Composition about Life” (Seikatsu Tsururikata) in Tohoku Area: Relation to “Social Studies” in Japan

研究代表者

土屋 直人 (TSUCHIYA NAOTO)

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：10318751

研究成果の概要（和文）：

本研究では、北東北（青森、秋田、岩手）3県において、戦前および戦後初期、生活綴方教育実践を展開した教師たちの実践の実際の一部と、それらの特質について検討した。本研究では、第一次資料や聞き取り調査の中から、「社会科前史」にあった戦前の生活綴方教育実践の実像、個々の教師の内面に蓄積された教育的知見を指摘した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I examined a real part of the practice of teachers who developed “a life composition educational practice” before the war and after the war in the early days and those characteristics in three prefectures of North Tohoku (Aomori, Akita, Iwate). In this study, I pointed out educational knowledge accumulated in the real image of the "social studies prehistory" prewar “life composition educational practice” that I looked good with, the inside of the individual teacher from the first document and hearing investigation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：教科教育学、教育学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：教育実践史、生活綴方、北方性教育、社会科教育史

1. 研究開始当初の背景

戦前・戦後日本の教育実践は、個性豊かで質的にも高水準な成果を蓄積してきた。その遺産、実践史の実像についての歴史的な究明と明確化は、今後の教育理論および実践の全体的発展を見通す際、必要不可欠な基礎的研究となる。本研究はこのような基本的な問題関心から、戦前・戦後の豊かな教育実践史と

その今日的意義を解明する作業の一端を担うことを目指すものであり、特に、社会科という教科の実践史、そしてその史的背景にある教育実践の一つの領野で、卓越した教育理論を生み出した実践蓄積を有する戦前・戦後初期の北東北における生活綴方実践の教育遺産に着目し、それらについての実証的な調査・研究を通して、現今・今後の社会科教育実践に与える示唆を見出し、現下の教育実践

改革の前進・発展に寄与しようとするものである。

戦後社会科のルーツの一つには、生活綴方教育の実践蓄積がある。そして、北東北（青森県、秋田県、岩手県）には、秋田の教師たちを中心とする北方教育の豊かな伝統がある。北東北の生活綴方教育実践史を探ることは、教育実践史研究として、戦後社会科の出発点や、社会科実践の豊富な背景、その蓄積と理論を検証・解明する作業につながるものである。

2. 研究の目的

本研究は、北東北の戦前生活綴方教育実践が戦後社会科実践の史的背景・土台にあったという前提から、特に戦前・戦後の実践者の歩みに着目し、「地域の教育実践史」という角度から、「社会科前史」にあった戦前の生活綴方教育実践の実像を探り、あわせて彼ら個々の教師の内面に蓄積された理論を解明することを目指すものである。本研究では、戦後社会科実践の史的背景、その実体を歴史的に追究すべく、生活綴方と社会科の関連・連続性という課題に、地域に生きる教育実践者の視角から迫ろうとすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究においては、具体的に以下の4つの基礎作業枠を設定し、調査・研究の方法とした。

(1) 文献による基礎研究：本研究主題に関連する先行諸研究（生活綴方教育史、社会科教育史研究、等）の検討とあわせて、戦前・戦後北東北の生活綴方教師たちの実践の足跡と実際について、公刊された著作・諸資料を収集し、同時代及び後時代の視点から基礎的事実を整理し、実践の特質を分析・検討する。

(2) 戦前・戦後の北東北生活綴方教育、戦後社会科実践に関する未発掘資料の収集・分析検討：未発掘資料の存在を探り、特に埋もれている貴重な実践資料を発掘、整理する。北東北3県内の各地域における実地調査（各実践者及びその関係者、各関係機関等に協力依頼）から、史資料（地方教育雑誌、同人誌、教育実践記録等）の発掘・収集を行い、その分析・検討を実証的に行う。また、発掘収集した新資料を整理し文献目録等を作成する。

(3) 戦前・戦後の北東北生活綴方教育、戦後社会科実践に関する聞き取り調査：戦前・戦後に北東北3県において生活綴方教育実践を担った教師たち、あるいはその関係者や教え子らを対象に、当時の実践の実態に関

する聞き取り調査を行い、その分析・検討を行う。特に、各実践者のライフストーリーに関する調査を心掛け、その人物像や実践の足跡についても聞き取りを行う。

(4) 戦前・戦後の北東北生活綴方教育実践と戦後社会科実践との関連に関する総合的検討：上記1～3の作業の上に立ち、関連先行研究の検討とあわせ、＜生活綴方と社会科＞という観点、教育実践の蓄積の連続性とその理論形成の過程という観点から、社会科教育実践の背景にある実践蓄積の具体像についての総括的な整理・検討を行う。

4. 研究成果

・2008年度

研究初年度の当年度は、「戦前」の生活綴方実践に着目し、以下の過程の調査研究をすすめた。

第一に、文献による基礎研究である。戸田金一らの先行諸研究の検討とあわせ、主に以下の各実践者の実践の足跡と実際について、同時代及び後時代の著書・雑誌論文等を中心に講読し、基礎的事実を整理しつつその特質を把握、分析検討することに努めた。①青森：土岐兼房（『生活綴方と共に』1987）、三上齐太郎（『生活綴方運動の回想』1990）他。②秋田：加藤周四郎（『わが北方教育の道』1979、他）、佐々木昂（『佐々木昂著作集』1982）、鈴木正之（『北方教育著作集』1992）他。③岩手：石橋勝治（『戦前戦後を貫く民主教育実践の足跡』1972、他）、高橋啓吾（『生活綴方への回顧と今日性』1979）他。

第二に、戦前の生活綴方教育実践に関する未発掘資料の収集・分析検討である。北東北3県内の各地域における実地調査、特に秋田大学附属図書館内「北方教育資料室」（図書館関係者等の協力をいただきながら）から、未検討の第一次史資料（地方教育雑誌記事、同人誌、学級文集、等）の探索・収集を行った。その上で、その一部について資料の分析・検討を実証的に行った。その成果の一端は、拙稿「1935年前後における北方教育運動の一断面—吉田農の一論稿から—」（後掲）等において明らかにした。

・2009年度

研究2年目の当年度は、昨年度に引き続き、「戦前」の生活綴方実践に着目しつつ、特に「戦後」に着目し、資料収集・調査等の作業を行なった。

第一に、文献による基礎研究を、昨年度に引き続き行なった。具体的に、戸田金一や村山士郎らの先行諸研究の検討とあわせ、主に以下の各実践者の実践の足跡と実際について、同時代及び後時代の著書・雑誌論文等を中心に講読し、基礎的事実を整理しつつその

特質を分析検討することに努めた。①青森：鈴木喜代春、橋本誠一、嶋祐三、ほか。②秋田：鈴木正之、花岡泰雲、ほか。③岩手：吉田農、永井庄蔵、吉田六太郎、菅原恭正、ほか。

第二に、戦前・戦後の生活綴方教育実践に関する未発掘資料の収集・分析検討である。北東北3県内の各地域における実地調査、特に秋田大学附属図書館内「北方教育資料室」や山形県国民教育研究所資料室のほか、図書館関係者等の協力をいただきながら、未検討の第一次史資料（地方教育雑誌記事、同人誌、学級文集、等）の探索・収集を行った。その上で、その一部について資料の分析・検討を実証的に行った。その成果の一端は、拙稿『「イサワ教育こんわ会」の憲法科特設論について』（後掲）（戦前戦後岩手の生活綴方教師・永井庄蔵の社会科・憲法教育論についての考察）等において明らかにした。また、以後における、関連文献目録を作成する目途として、一定程度の教育実践史関連の基本文献（教育研究雑誌の授業実践記録等）の収集を行うことが出来た。

更に第三に、北東北の生活綴方教育の教育史教育内容としての価値について、拙稿「今、北方教育を振り返る意味—卒論検討、講義の中で考えたこと—」（後掲）において、考察を行った経緯と内容を公表した。

・2010年度

研究の3年目・最終年度の当年度は、一昨年度、昨年度に引き続き、「戦前」の生活綴方実践に着目しつつ、あわせて戦後にも着目し、資料収集・聞き取り調査等の作業を行なった。

第一に、戦前・戦後の生活綴方教育実践に関する未発掘資料の収集・分析検討である。北東北3県内・東北6県の各地域における実地調査、特に山形県国民教育研究所資料室のほか、図書館関係者等の協力をいただきながら、未検討の第一次史資料の継続的な探索・収集を行った。その上で、その一部（北東北3県とあわせて、特に山形）について資料の分析・検討を実証的に行った。その成果の一端（および関連文献目録の作成・公表）は、学会発表（後掲）等において明らかにした（公表を行なった）。具体的な研究成果は以後論文のかたちで報告を行う予定である。

第二に、橋本誠一氏や嶋祐三氏（青森）、千葉努氏（岩手）への、戦後生活綴方・北方性教育運動に関する聞き取り調査を行なった。戦前・戦後の生活綴方教育実践に関する聞き取り調査の成果については、その整理・分析を行った上で、以降において成果公表を行う予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5件）

①土屋直人、「今、北方教育を振り返る意味—卒論検討、講義の中で考えたこと—」、『民主教育研究所年報 2009 地域に根ざす教育運動の歴史と現在』（民主教育研究所編）、第10号、査読無、2010年、80-105頁。

②土屋直人、「「イサワ教育こんわ会」の憲法科特設論について」『岩手大学教育学部研究年報』、第69巻、査読無、2010年、23-44頁。

③土屋直人、「鈴木喜代春著『子どもとともに—私の教育実践史—』解説」（同書に所収の巻末「解説」）、教育新聞社、査読無、2009年、799-809頁。

④土屋直人、「永井庄蔵の「憲法科を創設することの提案」を読む」、『岩手の歴史地理教育』（歴史教育者協議会岩手支部）、第8号、査読無、2009年、92-103頁。

⑤土屋直人、「1935年前後における北方教育運動の一断面—吉田農の一論稿から—」、『岩手大学文化論叢』（岩手大学教育学部社会科教育）、第7・8巻、査読無、2009年、113-144頁。

〔学会発表〕（計 4件）

①田中武雄、土屋直人、ほか2名、「北方性教育運動と「生活綴方的教育方法」—東北民教研の実態調査から—」日本教育方法学会第46回大会、2010年10月10日、国土館大学文学部（東京都）。

②臼井嘉一、土屋直人、ほか10名（共同研究代表者：臼井嘉一）「戦後日本の教育実践（6）—地域教育実践の事例的研究（京都・北海道を中心に）—」、日本教育学会、2009年8月28日・29日、東京大学教養学部（東京都）。

③臼井嘉一、土屋直人、ほか10名（共同研究代表者：臼井嘉一）「戦後日本の教育実践（5）—「全国青年教師連絡協議会」（全青教）と地域における教育実践の展開—」日本教育学会、2009年8月28日・29日、東京大学教養学部（東京都）。

④土屋直人、「戦後初期青森における鈴木喜代春の生活綴方実践について」、日本社会科教育学会第58回全国研究大会、2008年10月10日、滋賀大学教育学部。

〔図書〕（計 3件）

①土屋直人、「第2章実践編 国際経済の授業実践例—「政治・経済」—（南北問題と国際協力）」「第3章理論編 平和教育」（魚山秀介ほか編（魚山秀介ほか12名による共著）『新しい公民科教育の実践と理論—公民科教育法—』清水書院、2011年3月、102-109頁、136-141頁。

②土屋直人、「歴史教育・社会科教育の動向」（共著）、歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報 2010年版—東アジアの平和構築に向けて—』、2010年、182-188頁。

③土屋直人、「法制及経済科」「公民教師用書」（日本公民教育学会編（工藤文三ほか105名による共著）『公民教育事典』、第一学習社、2009年（共著）（全272頁）、190-191頁、204-205頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土屋 直人 (TSUCHIYA NAOTO)

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：10318751